

和刻集

尔奴之部

二十至  
廿一

津田文庫

文庫 1

1604

19





倭訓琴前編二十

洞津 谷川士清 纂

尔の部

小 てふく詞めてふいとより輕しとみけつ相連ふありかゝは水くくることの  
 易く和とく易てもも墨の江の松と秋風のそ松よ易ても同一續後拾遺  
 集よ

すくすくの松よろく雪つちかすまよりりぬふ沖津ゆせ

此の古今集の松と秋風のそとをりつるものふり松とみけつ一文にても  
 列子の風乘我耶我乘風乎のそとをりつるもの大に異なりとるる○そ後の意は用  
 おたるとあり○於そふとよむの諸助也于於二字とありたるあり又梵書の注は  
 於詞寛而婉干詞直而切とえたりよめて休字は用たり此は彼とあり助辞也  
 とらつ又我乘と我乘とをりつるものふりつるもの大に異なりとるる○そ後の意は用  
 詩は心乎愛も用たり哉とよむの詩は陳錫哉周も手は同一之と  
 よむの史記も及之趙のあり在とよむの詩は駿奔走在廟のあり也向とよむの

倭訓琴 卷之二十



010190597143



とらひ毎年給の二分の目一人一分の史生三人加二合志て隔年二分の椽申  
給る納言の三年一度椽申給る参議に至ては常二合する末能くは履く九節  
舞姫と献は聖年の二合一と椽申給る加ら

△よぎ 和字柔字熟字等とよを煮と訓意通せり○日本紀に饒とよ萬葉  
集に飽字とよをり

よぎめ 古事記に海布とよ延喜式に海藻とよをりふざい和也めは總名あつ今  
わうえとよは裾帶菜也とら

よぎて 神代紀に和幣とよをり大殿祭祝詞に古語云尔伎氏ふざい精細とら  
也ていたく及也荒破和妙ふとらよ同

よぎん 饒賑贍字ふとらを和の音んふの助語ふざいともとらふと  
ざんふとも新撰字鏡に伽とあざりともをり口語にふざいやうとらふ  
出羽とてふざいともとらふ○えとよ國のふざいともとらふとらふとらふ

よぎた 和妙に書り祝詞式にふ荒破と對らる古語拾遺に和衣と作るたふ  
絹布の名あつ大嘗會に繒服とええたるも同

よぎたふ 日本後紀のよぎたふのたふやわしけりけり萬葉集よ和靈とええ

△よろ 神功紀に和鬼とよ和まらる御鬼とら荒鬼と對てら

△よぐ 神代紀に走字逃字とよをりふけるふざいともとらふけふが俱とら  
ぐ北字とよむ漢書注に北陰幽之地故謂退散奔走者為北とええとら逃  
の古事記にあり逃の倍字のよ字書にええとらもとらをり○諺にふざいとの  
よとら齊王敬則が檀公三十六策走是上計とらる是あり

よぐむ 悪字憎字ふとらをり○倍諺に坊主が憎らむに如装を憎らむ  
ら六韜に愛其人及其屋上鳥憎其人者憎其除昏とらをり悪字去声洪武正韻  
に仇怨也と注と

△よりり 萬葉集よをり深よりり深去来とらる如○よりりのまは  
ま也縦よりりの縦去来也惑よきい惑去来也入よりりの入去来也経よりりの経去  
来也用よりりの用去来也とら

よげづ 武藏野の景色也春より夏くけてうらやめよとら空よけく生え  
りりる草の京よ地氣のころけりともとらよりのえをいませ未深とらるく水の

流るる如くともをりまことの水よりぬすこゝまよゆけぐ又いふよるゆは流るる  
名りり志性録に深利東鹿縣中有水影長七八尺遠望見人馬往來如在水中乃至  
前不見水くもるる夫木集

東治のありしるる迹はけかききと代とすか

わげふー 伊勢物語にも無似氣のなまらうらう

△ふて 和集とふふと同一ふこくちふらひふつこもふふらふも色色  
爾とよまらうあつらうもらう○故土よふこらふも同義あり

ふこふ 濁とらふ煮煉のなまらう一説に水すを魚す水よふら魚ふげら

詞も糸も通らうもらう○濁川の信濃浅間の山陽に流る水とら其水源

と血池くらう

ふこやう 日本紀に温字遊仙窟に盥暗とよまらうやう助語新撰字鏡に

蛭とよまけらとよまらう靈異記に柔とよまらう万葉集にこよともと

よごららふ 何れもあつらる也があ及ぎせきれ女詞と好まらう

よー阿佛の口傳よえらう

△ふー 西の日の往去の義也とらう○てあまらふあー既往の辞あり休字あり

散去成去別去と書らう如ー○辛螺とらふ其殼の赤とらう丹のなー助

語新撰字鏡に蚌とよまらう和字うや○ふらにー香螺あつらー紅螺にが

らうハ蓼螺とらう○丹石と畧と俗とらう代赭石あり

ふド 虹とらう丹のならうすらの反也又白虹もる西日本紀にぬどとらう万葉集

よのしとらうも皆通音也今も東國の俗にのどとらう靈異記に電とらう

埃囊状の虹とらふド霓とらふとらう博聞録に虹霓但是雨中日影也と

えらう又霏雪録に蟾蜍の吐一氣也とらう備中の岡氏やとらうとまのあらうと

まらう虹霓の字出よりまらうとらう西國にてゆらとらう夕虹の畧とらう○倍と

にどと首よめけたらとらうとらう二字のな也實名二字のものをと

とらう二字とらう古事談明月記ふとらう又名のうのぬと字と他人よ

らうと二字とらう大諸禮とらう

いー 錦とらう丹白黄のな也日本紀に丹敷と作る○孝徳紀に大伯仙錦小伯

仙錦車形錦菱形錦天武紀に霞錦文武紀に窠子錦衣服令に雲錦本朝式に

暈網錦高麗錦軟錦西面錦刺車錦兵錦小窠錦一窠錦二窠錦五窠錦屋形錦木又えうり○後とあるは華陽國志に蜀時濯錦於沅江中則鮮明也と見えうり○綿とて家よりのとよめるは朱買臣の故事也とあるは錦も同し源氏の錦をくらうしとも見えうりひるの後とよめるは唐書に衣錦昼遊と見え○錦の文字を織ハ晋の賈滄の妻錦と織て為廻文詩以寄滄は故事也○錦貝あり色種々也○錦島ハ山家集に伊勢のづれ錦乃島と見え神鳳披ふ志摩に入ると今紀州に属せり錦浦も紀州にあり又隱岐にあり又出雲にあり

あうり 錦織とよるはしつとわんをた及こ也錦服又錦部とよむも同しにしつとも同し丈夫集に

しつとよのあはれおととふせの誰とるかふふふに金の里

辺のの後綴のきん○うらうらとらふあき下綴まきし柳の如く垣うらと長く纏ふよらうし一名牛ころし鞭ふするともてあり

よーきき 錦木とまりえひもあはつる木也と能因るらう又陸奥の俗に女と恋し一尺のうら木と色づりて女の門戸まきまきありて千束をかきうらす河

とんとたりはらう入ありとたりふと取と入るらう折らうしとよらうとふらうしひひらうしう東えひとの手かきまきあけ昔は倍あるし今花輪といふ錦木塚あるは後人のまきざしといふ匡房の秋よ

ねしひがひらうまきまき錦木け千束とよて違ふしとらね

錦木の論は恋の添木といふともこのす錦木成り○今俗鬼箭といふ葉の色とて名しつる也大高檀紙は此紙とて造るの後拾遺集にまゆみのりちかといふ一種紅實ありて羽ふらふふすゆみとらう石部ありしとらう○或は炭の本をらふらう袖中扱と見えうり物の色に合は祝して女の門まき也とらう

△みす 似しつる也すを隠しに不似也

よすつと 古事記に丹摺之袖とらも丹土は摺たるとらう

△みせ 質はらふよせとらうのらうひよせるとらふ是也今似のふ也抱朴子の貴遠賤

△みそ 近有自東兵故新劍以詐刻加價幣刀以偽題見宝  
出雲風土記に御靴飯ふ多食坐諾と見え今も喰物よらうとらう



土俗はよのつら葦の葺りやあかがらハ益莖ふつー○布と常陸の俗ふ  
のどら上陸列も同一

ふのそ

祈年祭祝詞は荷前云云荷緒縛堅くええ万葉集にも荷向菫の荷の緒  
くええう今年初の物と奉々と荷前くくひて選り納め荒薦よ包緒して  
馬に乗駈らとらあり

ふの月

延喜式万葉集は丹穂くええう赤丹穂くもらう穂の赤とやとよ  
む意ありける也

△ふい

庭場等とよまらう文選は坪もよまらう○海上ゆく日よりのよと万葉集  
よお波あ〜〜ともよりもちがけ〜ともよまらう又庭の字も用ゆる波穂よて平  
垣あると庭よ〜〜入ら〜〜や同集は水の上玉ゆく如く舟の上の床よ洒る如くあり  
よた〜〜ひ合す〜〜日知く書い假字た〜〜とらう○思の終の日記は庭の座五  
へ轉盡の依あり〜〜○丹羽く書い氏姓郡名〜〜類聚国史天長三年の表文  
丹羽止戸周氏開七百之期とええう

ふいび

倭名抄は燎とよまらう庭火のふく四声字苑はる御神樂の時官人庭

火とたく文徳實録は庭火皇神とええう是火とあ〜〜○建武年中行事に  
神樂あり庭火より始て朝倉其駒ま〜〜つら皆神樂の名あり○今婚禮出  
輿の時其家の門戸は庭燎と設く是を送葬に准た〜〜北史は我  
邦の風俗と記して婦人夫家必先跨火乃與夫相見とええう遺風あり

ふいり

俄字速字驟字暴卒とよまらう俄通〜〜賊は作る先幾之頃也〜〜はす  
還も急卒也驟は疾速也卒ハ猝ハ通す万葉集はふ〜〜くどもよまらう真名伊勢  
物語は卒尔日本紀は倉卒とよまらう左の杜注は輶猶卒也〜〜の瓜い  
〜〜あり

ふいだら

頭昭説は庭は〜〜神のわらたまふ事諸社行事は庭の庭とてあり  
又うりま〜〜ら〜〜る〜〜掌相記は降臨の地と神は〜〜はす神子の詞は  
家来のま〜〜あり

ふいふい

新嘗といふ日本紀は〜〜又ふい〜〜もよまらう庭の響のふ〜〜のあ  
ふよ〜〜ふ〜〜ふ〜〜庭の齋庭とら〜〜又ふい〜〜ふ〜〜通〜〜直は新の茶  
あ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜○古語拾遺は新殿とふい



あひのるやしとる

あひたづみ 和名抄に潦字とよむ文選に潢潦とよむ朱説に道上无源之水也  
とる也万葉集に庭多泉とあり流るの枕詞也仙覚抄に立水居水の事とあり立  
水の泉也とあり喜撰式に庭水ふりつとあり又竹集に庭のたつともよむる雨伊勢の俗  
に濁水とよむ

あひくあづ 神代紀に鶴鶴と訓せり庭東押觸の事あり菅清人鶴鶴賦に下集金門之

内韻頑玉階之前とあり又紅国集にせり○黄鶴鶴あり女青一一種脊黒一  
腹白と者あり○伊豆の言ありて神の鳥と称して安に捕寸安藝國も同  
伊勢の神衣大和錦に此鳥の文ありと貴

あひ 古事記日本紀等にあり新字とよむ丹日の事なく日出よりあひ  
とる詞ありあひあひとありあひ花あひ衣あひまあひ肌あひ骨あひ  
あひ末蘭ふとありあひ今長門の国に新らとありあひふとあり相摸総  
野にあひとあり

あひ 鈍字とよむあひあひ色あひあひ是也あひあひとありあひあひあひ

あひ色とありあひあひ色○鈍色に淺と色のより薩戒記にえ服暇間事  
着服者可用鼠色其色以墨深之或入移花於墨とあり其深色錫の  
あひとありあひ色とありあひ古より錫紵もあひ今義解に錫紵者細布  
即用淺黒深也借服に鈍色と音とて唱

あひ 新治と書り治に壑也とあり○新治ついでに属するに常陸の郡名  
ありと日本紀に出たるに地名よせて新壑作るとあり又あひまるとあり新越に  
ついでにあひたまるるあひとて教の語とて意あり今もあひまるとありあひ  
とありとあり○村里の名に新開と呼も同義に新開田北山抄にあり

あひ 新嘗の事古事記にあひあひとあり神祇令にあり大嘗祭にあり霜  
月中の外の日に神明に新稻と奉るの祭儀也卯辰巳三日の間朝に諸神に奉る文天皇  
聞にあり也白川殿七百首に

あひ 契とありや神の事とありあひあひとありあひあひとあり  
又万葉集にありとありあひあひの東詞あり  
あひ 伊勢物語にあり始て主婦の事とありあひあひとあり新嘗也萬葉集にあり新

枕とる也

△ふふ 日本紀和名按よ壬生とよまるといふは、其音也筑前國上座郡壬生布と云也  
 壬生の胎、妊産生の事と云り壬生部の事日本紀舊事紀云委一〇丹生と  
 云よまるといふは、國安藝郡丹生布と云ふ丹生之土と云ふ式宇陀郡丹生  
 神社あり兩師村と云ふ是神武紀云免田川朝原云一〇侍中群要祈  
 兩使事藏人獲向大和國丹生河上兩師社と云也神武紀云丹生の川上と云ふは  
 大和吉野也其流紀別と到る亦丹生川と云ふ其の神社あり式云丹生、丹生  
 村と云ふ寛平格は丹生川上兩師社と云ふ万葉集は斧取丹生檜山の木折来  
 ていふと云作り三吉野の瀧も云ふは、萬葉白浪又攝列矢田郡あり丹生山田  
 と云ふ又万葉集は斐太人の真木流云布之川と云ふは、大和宇智郡也式丹生  
 川神社あり伊勢飯高郡丹生の山丹、碓及水銀と出たり式は丹生神社あり〇  
 靈異記は巧とよまると

△ふふ 三代格よ入部之便と云え扶桑略記よ入部之圖ふと云ふと云り庭訓  
 御領入部と云ふ其部曲は初て入部と云ふ日本紀よりの事と訓せり女之意

異せるともや

△ふふ 日本紀は贄又苞直と訓せり荷上ニカの畧と云ふは荷前ノサキ同意之又新饗ニヒスの畧  
 と云ふ新撰字鏡は賦もよまると云ふ〇室治中の人姓も云ふと云ふ〇贄野池は山城  
 級喜郡あり今猶御贄と貢すやと云ふ贄川は信濃築摩郡あり  
 △ふふ 袖中枕は田舎は始めは早稲刈物として里隣の者集めて食成は  
 云ふと云ふと云ふ万葉集の秋よのころりの下よ云ふと云ふ

△ふふ 日本紀は甚字と訓せり肥後風土記は俗見多物即云倍佐尔今所載  
 魚甚此多有可謂倍魚と云ふたり今も甚と云ふと云ふと云ふ此意ありと云  
 云ふは倍沸あり

△ふふ 無名按は秋田と初て刈て春の贄の人と事門と云うて管ひの事と  
 云ふ新饗ニヒスの畧と云ふは万葉集よ  
 △ふふ 万葉集の秋田と初て刈て春の贄の人と事門と云うて管ひの事と  
 云ふ新饗ニヒスの畧と云ふは万葉集よ  
 △ふふ 是は下總國葛飾郡よ作らる早稲と云ふ其畧は新嘗祭するよ其齋の中よ  
 大和の人の内よ入るれと云ふと云ふと云ふ外よまをたてありと云ふ



よすたよえすのくごきあせあん御ややくある時よえき

君代の二万此里人のけしきひく今もよきあつてのよき

とよみより此勲賞の侍従よあきうやええり侍従の侍従あり

△ふみふ 日本紀に任那とあり青之世国の号に家名より名けたる事出仁記よ

又えより今朝鮮は属す宋書にもえより

△まぢやう 人長とあり神樂よあり御神樂行事の者近衛の官人勤心資忠記に御

神態乃人乃長佐とえよりその神も天鈿女命也と云ふ神は輪とくけり鏡

河摸せりいと体源抄よえより○人定は妻時也日本紀よゆ

△よめ

△よと 秋の掌よと峽よと野よと山よとくまかきよとよめりあやゆ

く満しゆの助字也

よとつ 靈異記に荷河訓せり荷持の系也今荷物の子河用るつといふ

△よや 語末の詞よらるる家集に疑字河よらるる八瀬大原よ平語よつて

らるよや又ふ也

△よゆ 煮とあり熱のよえりいとよとくといふえり又やす又とりよゆ

△ふらうご 女御のよも也雄略天皇の紀よ始てえより今ハ親王三公の女の中よ

こ入内したまふ○女御代ハ女御を時よ女御よ代よて召らるらふ○花山

院院幸の女御かくせ給ひ一府多慕の御ふりより給ふ寛和二年六月御出

家あり一三河守大江定基愛妻は後をやう僧よ成一と寛和二年六月の

事也○世よ女護の罵らるるハ大嶋也一小嶋の内島居邑よ八郎明神あり

鎮西八郎源為朝の祠也嘗て伊豆よ竄せり時よ此島に獲て鎮制せり

よとて

よとつねん 女院のよみくせ也國母派了奉せり一條院正暦元年皇太后

詮子尼とありたまひて東三條院と号と是と始とてくらふ○門号派も

て呼ら始ハ後一條院の御母后上東門院彰子より也とて

よとつねん 侍中群要よ多女房所供也召男房事希有事也盛衰記に女房

男房とええりて尚侍より已下禁中の女中と称せり名目扱よ女よと

よとつねん 今下よは妻女通称とす○蝦夷よ女房の事をまらるといふ京に

内江戸のやうな夜よかへてお家の名は琉球ようちよ

△小ふら 宇治拾遺よ由申吟声也とて徒然草よふよひよとて由或の

吟とふらよとよとて今も東國四國おどよ此語遺る日本紀よ吟とふらよ

△小ふら 女官也廣くらのやうに諸家此諸大夫のむすめやわらわがり

ての采女よあつとてとて

△小ら 倍よ非とらふらの轉せら上總の國俗のやうに

をひとらふらよ對つる名也○ヤウヤウの山非也又水非也

△小ら 文選よ職遊仙窟よ斜眼日本紀よ邪脱靈異記よ睚又眦新撰字鏡よ眦

又睽とよとて平家物語よやうまよとてえとらまふ及む○やうとあふ職合の名

△小ら 和名抄よ菹とよとて榎樹の名也○菹と造る法は式よとて

後よ練菜と稱するも是と下字集よとてとら新撰字鏡よ菹とよとて

字考得と

△小ふら 日本紀よ主をよとて韓語あり

△小ふら 煮又似とよとて肖も同と又彷彿もとて○亨も烹も同と

△小せ 榎瓜よとて言は我邦と專食用とせよと其系延喜式よと

えとて供御もと用ぬとせあつとてとて和名抄よのやとれと訓せり

やとて粘滑の系成と新撰字鏡同と○和名鈇よ鬼葵とてとて花

とてまふれとて皆滑とてとて本件よとて元花根如榎根とてとて

○山とて蕪菜也又柳と訓せり

△小ら 鮎とよとて禰叢經よ牛飼とてとて和名抄よかけとて

らと新撰字鏡よ鮎と牛のかけとてとて浴よとてとてとて

の年のゆとてとて

△小ら

△小と

△小内

△小名

△小ねとん 和名枕漿とよまろ煮水也倭姬世記の御水と云ふ也よまろ人  
ねろ人よちとゆすよまろ

小ねひうま 日本紀の駄をよまろ何員馬也和名枕以買物馬也と注せり

聖武紀の令天下諸國改駄馬一疋所負也重大二百斤以百五十斤為限之云

倭訓栞前編二十終

倭訓栞前編二十一

洞津 谷川士清 纂

奴の部

ぬ 不とぬとよむの例万葉集に多しふく及ぬ也○去と万葉集にぬと  
よまろいぬの畧あり世よとんぬのぬとよまろ○寝とぬとよまろの  
畧也万葉集に宿もよまろ又ふゆ及葦と通つる古今集にぬとよまろの  
伊勢物語に女うらふたてぬとよまろ真名本に眠とよまろ○雅亮世と  
よまろ右と下にてぬとよまろふまろとよまろ歓迎の臨終に右脇而卧とよまろ据も其  
右脇の系に瑜伽論よまろ又延喜式大学寮に歎卧下左故不用左也よまろ  
よまろ○沼津とよまろぬも畧也通鑑盧奴縣の注よまろ流日奴とよまろ和名枕  
郷名よまろぬとよまろも沼の系ありぬまもよまろ式武藏國足立郡よまろ國沼地  
祇神社也○難とぬと訓する天武紀にぬとよまろ難いたまもよまろ瓊屋と云  
事記に沼屋とぬとよまろ相通ふありぬとよまろ玉の光滑と称するよまろ○古昔に農  
濃とぬの假名よまろ



声はふくは是也物語はぬをほくくもろえり和名抄も禮拜をも訓せり

△ぬき 緯とら横は貫スガの糸也○壁間ぬきとらも柱を經タテとらも名

也和名抄は欄額とらぬきとらも新撰字鏡は楯と訓せり又とらも

とらも○信長の時代は盗人とぬきとら人の刀小切ふくと枝取事とせり

ぬきと 延喜式は貫貫とらも波水ふとの志あぬたたと盟は貫は霞ふとら

又万葉集はもろえり物語はもろえりゆたらし流をまろよけつたぬ

ぬきと 相撲とら江次第は昨日相撲中枝出之令相撲也とろえり元正紀は置枝

出同とろえり

ぬきと 枝也各と音時有用の語と枝取するはと藤東坡詩は白首枕杖書とえ

えり枝と同一

ぬきと 詩は踏字とら枝足の糸也文選は踏地とろえり鷺歩とら

也とら源氏ぬきとらあゆむとらぬきとら

△ぬきと 枝又貫とらろ刀をぬきの枝玉をぬきの貫の枝之神代紀は袖もよろ探

衣と貫とら

ぬきと 信は懐手の事とらぬき入も大奴帝はろえり西土の文は袖スガ

とら意也

ぬきと 寒夜は鷹諸鳥は捕つて已ら腹はゆるを咽る桐は其鳥と放ちや

まで其鳥の行方其日鷹はゆるとら此事三才圖會鷗の條もろえり

せうおやたらといた皆同一今是を小鳥ヒメとら

ぬきと 皆とぬきよのヒメ重とては我妻のみとら事河也

とら傳つ

ぬきと ぬき當の教はつたれは古里はぬきとら今あつたれ

△ぬきと 脱とらけら反くぬきとら詞破石集はろえり

ぬきと 参宮は限と枝参と称とら事延喜式は元王臣以下不得輒ヒメ供

大神宮幣帛ヒメ后皇太子若有應供者奏ヒメ又式及儀式帳は若欺て幣帛

は進る人の流罪は准とら諸雜事記は冷泉院安和二年の太政官符は自

非公家御祈禱之外輒不可致下之祈禱とら古今のく庶民はとら



参考のあつたりしつらひしむせる詞ありて指たるあやの下よえたり

△ぬぐふ 神代紀に拭とよせりぬぐふと同

△ぬさ 万葉集に幣と訓せり神に献る物よふとて五色の絹布とて足ふり

用なりとて思へり未織の木綿麻と通し呼りて後世麻ともよせり又抜麻

ともおれぬとあそぶや○源氏物語に扇と櫛と人の許ははらすともぬさ

とせり幣帛の本意あり○此のぬさをとらへて手向ふとよめり古今

集羈旅よ朱雀院奈良山よありりる村よ手向ふとよみ侍りとも也此朱雀

院に寛平上皇御下せり此御幸に昌泰三年十月宮に備御幸次と攝津國住吉濱

と御幸せせり其道行ふの事れり素性法師手向ふはけこの袖とて

まのこよふと此度とて管公の供奉の事日本紀畧扶桑畧記等よえり○

葬儀に大麻あり今紙花と称するもの也西土に紙花といはれり花あり

ぬさつらり 源氏に春の手向ぬさ袋とてえたり質木の枝に木綿とけけ又綾錦の

五色にぬさしとて首にかけ道祖神を祈るは向するといふすはたつ袋ありと

らり拾遺集に物まらり人のとてぬさをむすび袋に入つらりとえり新千載

集

わづらひのふ身の神よ向すぬさのかひ風やすなちん

○今死者に白布の袋を首よけちむるの風俗あり是もぬさ袋の遺意也とらり或は供

米質木幣帛被申とも入らり

△ぬい 主字とよめり日本紀にぬいとてぬさたりぬいののちりたる語にて

のらぬぬ也古語よりぬいのとてぬさ字を加つ飽味之大人三熊之大人是也

ぬいの某ぬいとてぬさ字を加つ大物主事代主経津主のちりたり○

物語に人と稱して某のぬいとてぬさの事也東鑑に主とぬいとてぬさの詞とて

えたりぬいと通す大人とてぬさの事也同義あり○主人をぬいと呼は大和物

語にぬいと今ぬいととてぬさの事也○傳にぬ漆器に惟高親王より始ると今江州

日野に漆椀とて勢利多氣に物子と造る傳に祠ありて惟高親王の靈あり

とらり

△ぬすむ 盗はらぬ抜掠の義なり○貧の盗ハ孟子疏に盜賊起於貧也

ぬえり

ぬえり 倭名録に偷兒法訓せり盗人の系金葉集よりあり ○セコ盗人  
牛宗文より今小ぬえりといふ如し ○鉄もよあり東坡詩に開戸夜無  
鉄よりえり鉄略の義也周禮注に鳥喜鉄盗便汗又 ○枕草紙より  
ぬえり人かふとあるに只人ありすとありぬえりては辭也禪語に  
老賊といふ如しといふ今とあり人を罵るに詞に大盗人といふ竹取物  
語にぬえり ○袖よりふといふ信語に衆妙集に  
一枝の花ぬえりといふより袖よりふの山の峰より

○盗人よ鑰といふ信語に史記に藉<sup>カン</sup>後兵<sup>ニテ</sup>而竇<sup>モクラス</sup>盜糧<sup>ニ</sup>者也とあり ○盗人  
の脚といふ草ハ天麻也仙臺の称也

ぬえり 盗まり也 源氏より古忌といまりといふ如し 万葉集に  
ぬえりい〜とぬえりい〜とあり

△ぬえ

△ぬえり

△ぬえ

沼田といふ ○下学集に餽贈とぬえりといふありぬえりといふ  
三議一統はあつものどつ〜ぬえりといふありぬえりといふありぬえり  
水は漬〜て食ふと多食<sup>ニシテ</sup>食坐<sup>ニ</sup>といふありぬえり沼田と改を〜あり ○奴  
田城は安藝國也又相摸にありぬえり三浦黨の持〜可也上野國沼田庄沼田三郎家  
政の女

たつとぬえりみちと〜けり入月た〜とぬえりぬえりぬえりぬえり  
後伏見帝御製とたまふ

上野やぬえり〜ぬえりぬえりぬえりぬえりぬえりぬえりぬえりぬえり  
故其女と圓珠姫と名

ぬえり 沼田也楮よりあるにぬえりといふありぬえりといふありぬえり  
の譬にぬえり〜ぬえりといふ也肥前の佐賀に草臥る事ぬえり沼田の如〜あり ○  
ぬえりぬえりの信語と同意あり

ぬえり 倭名録に触ぬえりあり角上浪皮也と注せり下学集にぬえり  
ぬえりといふあり ○触目の鳴鑼といふ鹿角〜ぬえり三方に触と残を目を

ニツと本と云ふはつらう那須全一宗高と屋嶋と云ふは扇射と云ふは矢是あふより  
牛家物語と云ふなり

△ぬり

△ぬつ

△ぬで

倭名鈔は白膠木と云ふなりぬででの畧也○日本紀は鐸と云ふは同し  
言事記の秋はぬてゆらくりやと云ふなり

△ぬと

△ぬと

△ぬふ

神代紀は淳浪田と云ふなり今しぬま也  
新撰字鏡は葦と云ふなり沼繩の葦也俗は葦菜の青と云ふなり根  
ぬふはもよひぬれはと云ふはひけはう又所よりて銅拍子と云ふは其茶の

形の似たると云ふなり他は浮て生あると云ふはゆは多くうにぬふと云ふ

よふなり新撰字鏡は類と云ふぬふはよふと云ふ法とおをぬふはよふなり○

やまぬふはよふ物に杜衡也

△ぬよ

△ぬく

△ぬき

△ぬの

布と云ふ和名抄にも縫幅の糸あるなり万葉集は小のともよふなり○  
布は幾端と云ふは通例は幾段と云ふなり續日本紀は云ふなり又筑紫の彼

の花越後の雪曝と云ふは布も物も云ふなり四丈布神鳳抄にも也

ぬのこ

布子の糸冷葛と同し古麻布と用たり又のことも云ふなり全浙兵制  
は綿襖と誤せり又布用為常服无綿花故也と云ふなり綿花はきりて也

△ぬをかま

和名抄は奴袴と云ふぬはぬの略也賤者と云ふはあは即指貫  
也

ぬがくは

日本紀古事記万葉集皆ぬをたぬく貫之家集にも二首ぬをたま  
と云ふたり後ようたたまとも云ふたまたも云ふなり天徳寺合の判詞はよふなり

時ハむが玉と云ふ誤也中勢まけぬは喜撰式は夜とぬは玉と云ふは

と云ふ玉と云ふはと云ふなり夜ハぬ縁あはぬと云ふは

と云ふなり○万葉集は年浪他麻と云ふ一首あり浪ハ波の誤なり

防人の予あれハ記々くむたまし〜  
 くら〜  
 ○万葉集に野干玉夜干玉鳥羽玉鳥珠黒玉と  
 いら和名抄本草と引て射干一名鳥扇射音夜と云延喜典藥或も夜  
 干と云せり祖庭車苑の野干又名夜干或名射干声如狼と云〜  
 鳥扇の漢名よ〜  
 形状よ〜  
 一いぬ〜  
 珠鳥羽玉〜  
 ○今按よぬ〜  
 ひ又前程車暗如漆〜  
 ふ〜  
 名け其実と野羽玉〜  
 実の色と夜干の名〜  
 たる履とい〜

○古事記の〜  
 とい〜  
 △ぬひ 俗よ繡とい〜  
 △ぬふ 倭名鈔よ縫と〜  
 △ぬべ 諾と〜  
 △ぬがこ 沼牙の〜  
 △ぬま 沼渚の〜

日本紀よ津名井津名川〜  
 害とぬま〜  
 △ぬみ 新撰字鏡よ〜  
 △ぬむら 日本紀和名抄よ繡と〜  
 縫物師





傳言子石卷之三十一

九



